コロナ禍の図書館サービス：アジアにおける瞥見

Library Services during COVID-19: A glance in Asia

図書館サービス研究グループ
山田美雪（兵庫県立大学）
孫　誌衒（大手前大学）
前川和子（桃山学院大学特別研究員）
大城善盛（元同志社大学）
志保田務（桃山学院大学名誉教授）

1　はじめに：コロナ禍のアジアにおける図書館サービスの概況

COVID-19（以下コロナ禍という）の蔓延は、全国、全世界に広がり、公共図書館をはじめとする社会教育施設の活動に大きな影響を及ぼしている。現在では公共図書館は以前と全く同じではないが開館が実現できている[1]。この中で国際図書館連盟(IFLA)はその状況を「COVID-19 and the Global Library Field」[2]としてウェブサイトに 2021 年 5 月からまとめている。「各図書館協会・国立図書館が策定した指針や、図書館再開に向けた課題、遠隔サービスの事例等が」[3]このサイトに随時更新されている。「各国図書館の閉館・再開館の状況、各国の国立図書館や図書館協会が策定した指針、安全を確保した上で図書館を再開するための取組、遠隔サービスの事例、図書館職員が在宅勤務を円滑に進めるための工夫、等が掲載されている」[4]のである。しかし、アジアの図書館はヨーロッパ、北米等に比べると情報がかなり少なく具体性に欠けているように思われる。2021 年 10 月 7 日－8 日にオンラインで開催された国際図書館情報学会（4th I-LISS International Conference）[5]のテーマは、コロナ禍の図書館であったが、コロナ禍の公共図書館サービスについての発表がほとんど無かったことは意外であった。実際にはアジアの様々な図書館で、利用者のために図書館サービスが試みられているはずである。それらが研究対象とされるには、もう少し時間が必要なのであろうか。

当研究グループでは、国内の図書館員が懸命にこのコロナ禍のもと、図書館サービスを模索しているのを認識している。上述の学会において当グループでは日本の関西の公共図書館の現状について発表した[6]。オンラインによるアジア諸国の図書館サービスを知ることにより、国内の図書館サービスの参考にと考え、手分けしてコロナ禍における、アジアの公共図書館のサービスを調査した。アジアの各国図書館は自国の言語で情報発信するところが多く、情報を得るのは北米、ヨーロッパに比べ困難を覚えた。ただし、情報はまだ十分ではなくさらに詳しいことは今後に委ねられると考える。

この発表は、コロナ禍のもと、アジア諸国における公共図書館サービスを瞥見することを

目的とする。ただし関係学会の中心国の一つインドに関しては今般医療状況等が複雑なため、調査がすすまなかったことをお断りする。

2　コロナ禍における韓国図書館界の動向

本項では、コロナ禍における図書館界の動きに注目し、韓国の図書館政策と図書館サービスがどのように提供されているのかについてみていく。

コロナ禍が始まってすぐ韓国政府は「感染病危機警報の段階的なガイドライン」を発令した。それに従い、殆どの公共図書館は各自治体と母体機関の決定に伴い休館になった。その後、休館と再開館が繰り返される中、新しいサービスを模索しながら運営を続けている[7]。

政策の面では、2020 年 2 月大統領所属図書館情報政策委員会が Web 上に国内外における図書館のコロナ禍に対応するための政策動向資料を掲載している。文化体育観光部は同年 7 月、「公共図書館代替サービス支援事業」として公共図書館の非対面サービスの支援のため 2020 年度 3 次追加予算を図書館分野に約 39 億ウォン支援すると発表した。また、公共図書館における非対面図書貸出サービスの拡充のため、「スマート図書館」の設置を支援すると発表した[8]。「スマート図書館」とは、ベストセラーや貸出率の高い図書などを 400 から 600 冊ほど備えた無人自動化図書館システムである。主に住民が多く利用する地下鉄駅や公園、ショッピングモールなどに設置されている。

図 1　韓国大邱市達西区スマート図書館
（孫氏撮影）

サービスの面では、2021 年 9 月 27 日、文化体育観光部が韓国図書館協会と共同で行った「2021 年全国公共図書館統計調査（2020 年 12 月 31 日基準）[9]」では、コロナ禍の影響で公共図書館の来館者数は 2019 年と比べて 65.9%減少したものの、ドライブスルー貸出、予約貸出などの非対面サービスの拡充により、一日平均の貸出冊数が 38%増加している。また、公共図書館によるオンライン読書文化プログラムが 770 館 18,096 回実施され約 440 万人が参加したことや、オンラインで利用できる資料の 1 館当たりの点数が 2019 年に比べて 31%増加したことも紹介された。電子書籍、オーディオブックなどデジタル資料が利用できる「電子図書館」の普及についても注目する必要がある。韓国の電子図書館は国立中央図書館が運営している国家電子図書館（National Digital Library）、国会図書館の国会電子図書館のほか、各自治体の公共図書館が運営している統合電子図書館、オンライン書店が提供している電子図書館、国防電子図書館[10]などその種類は多様である。オフライン書店 1 位を誇る教保文庫の KYOBOeBooK[11]や大学図書館や公共図書館、企業体の電子図書館など 500 館以上と連携している BOOKCUBE [12]などは専用のアプリから連携している図書館の ID があれば無料で電子書籍を利用できる。

図書館環境の物理的な変化では、今はどの図書館においても来館時には発熱のチェック

をし、電子出入名簿（KI-PASS）を作成しなければならない。館内では同時間帯利用できる利用者数を調整するために、座席数を減らして提供している。また、小規模読書施設「小さな図書館」の場合には、閲覧席を当分の間設けておらず、予約貸出や館内貸出サービスだけが可能なところも多い。

本項ではコロナ禍における韓国図書館界の動きに注目し、その図書館政策と図書館サービスがどのように提供されているのかについてみてきた。多くの図書館が休館と再開館を繰り返している中で、対面サービスより非対面サービスやオンラインサービスに積極的に取り組んでいる。

3　コロナ禍におけるシンガポール図書館界の動向

シンガポールは 1980 年代から情報政策を経済発展の要として位置づけ、近年はスマートシティ（ICT 等の技術を活用してインフラやサービスを効率的に管理・運営する都市）国家を目指してプロジェクトが進められていることは、良く知られている。その中で図書館は情報化社会における重要な機関として位置付けられ、1995 年に設置された国家図書館委員会（National Library Board 以下 NLB という）が、国立図書館、国立公文書館および公共図書館を包括的に運営している[13]。

シンガポールは 2020 年 4 月以降感染者が増大したため、4 月 7 日から 6 月 1 日まで、部分的ロックダウンであるサーキットブレーカー（Circuit Breaker）措置が取られた。この期間は学校、オフィス・店舗も閉まり、飲食店は持ち帰り・デリバリーのみ対応、運動や食品の買い出し等以外の不要不急の外出は認められなかった[14]。6 月 2 日以降、政府は規制緩和を段階的に解除する指針を発表し、図書館は 6 月 30 日まで休館していた。その間、NLB はデジタル図書館の機能を強化し、再開館後も様々なサービスを提供しており、以下がその例である[15]。

（1）閉館中、電子書籍、電子雑誌のコンテンツを増やし、新聞も過去一週間分も含め 8 種をデジタルで利用できるようにした。
（2）子供向けのオンラインストーリーセッションを配信。
（3）デジタルで様々なワークショップを開催。
（4） TEEN THINGS： 電子書籍、記事、短い時間のビデオなどを組み合わせたミニ学習パッケージを配信し、自宅学習をしている子どもたちをサポート。
（5） Holiday Specials with Librarians： 子供たちが学校の休暇中に多くの電子リソース、在宅資料、およびリソースを楽しめるように案内したビデオを作成。
（6） Home-based learning for students： NLB アカデミック e データベースと研究スキルを使用したビデオ講義。物理的な講義を行えなかった短大等に提供した。
（7） The Little Book Box： サブスクリプション方式による児童書の宅配貸出のパイロットサービスで 2020 年 10 月から開始。図書館員が選んだ英語の児童書 8 冊を毎月宅

配貸出する。4 歳から 6 歳までと、7 歳から 9 歳までの 2 つの年齢層を対象としている。利用料金は、月額 10.70 シンガポールドルで、申込者は 1000 人までと上限が設定されている。なお、申込み期間は 3 か月単位で 1 ヶ月に 8 冊まで利用でき、それは通常の貸出冊数とは別枠となっており、利用期間は 21 日間となっている。また、返却は期日までに NLB のいずれかの公共図書館の返却ボックスに返却する必要がある。なお、低所得者は基金の助成により 200 人まで無料で使える[16]。

（8）ブックディスペンサーを設置： チョア・チュー・カン駅に隣接している商業モールに 264 冊の図書が入るブックディスペンサーを 2020 年 7 月に設置。予約本を受け取ったり本や電子書籍の閲覧・貸出・更新が出来る。2020 年 7 月から 2021 年 5 月の間に 22,700 冊の利用があった。

図 2　ブックディスペンサー（NLB HP より）

（9） The Library Learning Journey： 2021 年 2 月から公共図書館で開始された高齢者のための無料のデジタルリテラシープログラム。情報通信メディア開発庁（Infocomm Media Development Authority: IMDA）と 2020 年 10 月から進めている SG Digital Offices プロジェクトの一環で、情報端末機器に不慣れなシニア層を対象に、デジタル新聞、Wireless@SGx（国内最大のフリーWi-Fi 網）、QR コード、NLB モバイルアプリへの利用方法を学び、デジタルスキルを身につけることを目的に毎月開催されている。

（10） Documenting COVID-19 in Singapore: NLB とシンガポール国立博物館（National Museum of Singapore: NMS）と共同で行っているコロナ禍の体験の記録の収集プロジェクト[17]。

これらのプロジェクトは新規に立ち上げたものもあるが、従来から行っているサービスやプロジェクトをコロナ禍の影響で更に内容をバージョンアップさせて進化させているものもあった。

4　コロナ禍における台湾図書館界の動向

2020 年 2 月 15 日から 21 日まで、台湾の図書館を見学した須永和之は、すでに台湾でも COVID-19 の感染が広がっていたが、まだ渡航が可能であったという[18]。この頃、台北のホテルでは非接触型体温計で体温チェックがあり、訪問した図書館では入館すると、体温チェック、マスクの着用、手の消毒が求められた。台中の國立公共資訊図書館、高雄市立図書館總館でも、図書館から同様の対応があり、マスクを装着していない利用者はマスクを提供された。翻って同時期の日本は、国全体としてマスクの用意が無く、日本図書館研究会の研究大会は急遽中止になった。このことから台湾は、日本より早く新型コロナウイルス感染症の

対策が始まっていたことがわかる。

台湾はこのパンデミックの中、いくつかの対策措置を講じた。1つは感染予防対策をとって開館、2つは感染防止のため行動制限により閉館、3つめは電子資料のオンライン公開、電子メール、SNSでのコミュニケーションなどの対策措置などであった。

2020年の公共図書館における人々の利用状況は、『109 年臺灣閱讀風貌及全民閱讀力年度報告』によって知ることができる[19 20]。まず、エピデミック、エピデミック予防に関する政策の影響で、図書館利用が制限されていた。そのため、「公共図書館の来館者数は延べ7,969万人（前年比30.59%減）で、本を借りた人数は延べ2,220万人（前年比3.27%減）、貸出冊数は8,015万冊（前年比1.41%減）となっており、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて数値が前年から減少…。」ということになったのである。しかしながら『報告書』には、借出者3.27%減の実数が75万人、貸出数1.41%減が115万冊であることが書かれていて、国民一人当たりの全国平均貸出冊数が3.4冊と記されている。このように図書館における貸出人数、貸出冊数が減少はしているが、「一方で、電子書籍の貸出冊数は363万冊（前年比42.35%増）に達し」[21]ている。

サービス面であるが、2019年発表者らは台湾を訪問する機会があり、韓国と同じく「スマート図書館」を見学することができた。台北市の地下鉄西門駅の地下通路内にある市立図書館の分室、西門知恵（慧）図書館である。2006年に台北地下鉄との共同事業として作られたものである。「面積は 60 坪で主に若者向けをターゲットにしている。蔵書は漫画が多い。無記名の悠遊卡があれば、誰でも入館できる上、RFID付き利用証により図書の貸出・返却を行うことのできる無人図書館」 である。この図書館の場合は、台北市の財政難、図書館の人員増が困難という背景をもって誕生したのであるが、コロナ禍の現在、ディスタンスの注意を払いながらであれば、利用者は安全に利用できる可能性をもつ。この時点で知恵図書館は 8 館あって、空港、公園などに設置されていた。

図２　西門知恵（慧）図書館

（Journal of I-LISS　JAPAN Vol.2 No.2 より）

５．コロナ禍におけるその他のアジア諸国の図書館界の動向

スリランカでは国立図書館がCommonwealth Learning（COL 1987年に主に旧英国連邦の構成国で設立された政府系の組織。遠隔教育やコミュニケーション技術を教育に提供することによって、学習の機会へのアクセスを広げることを目的としている）と提携し、コロンボ公共図書館と協同で、COL-Coursera Workforce Recovery Initiativeをオンラインで提供し、コロナ禍によって失業した人々に就業のためのスキル習得とスキルアップを目指した。さらに学習困窮者にはWi-Fiを含むICT施設を提供しており、結果的に女性の失業率の改善につながっていると報告されている[22]。

マレーシアではケダ公共図書館が、マレーシア大学ペルリス校と共同で、3D プリンターを使ってフェイスシールドを作成しており[23]、ペナン州立公共図書館では、メイカースペースを使ったリモートサービスでクラフトアート作成などを行っている。類似のサービスは、中国北京にある首都図書館や経済特区深圳にある深圳図書館等でも行われている[24]。

また、高齢者や病気の家族がいるなどで外出できない利用者向けに、マレーシアでは HELLO BOOK という本の配送サービスを始め、タイでは青少年向けに GRAB BOOK（日本では「本の福袋」などで親しまれているサービス）を始めた。

中国では国家図書館（NCL）が、「新型コロナウイルス感染症との戦い」に関する資料のアーカイブ構築計画を発表している[25]。 また武漢市では湖北省図書館と書店が協力して、軽症者用の仮設病院内に小さな図書室を設置した。古典、健康、科学、心理学からなる約 5 万冊の本がブックケースに入って並べられている。さらにホテルや自宅で隔離生活を送っている人々も利用できるように、8 万冊のデジタルブックや 8,482 のビデオも備えている[26]。インドでも感染症ケアセンターに療養中の感染者を対象に図書室を設置している。[27]

一方でインフラの整備や、図書館職員のデジタルスキルの精通度、予算等がそれほど恵まれない国や地域が多数存在しているのもまた事実である。そのような場合、紙と電子とのハイブリッドを目指すというケースも今後増えてくるのではないかと思われる。

６．まとめ

今回新型コロナ下におけるアジアの公共図書館についての洞察を行った。世界的な流行となったコロナ禍での図書館サービスは、どの図書館も最初はまず政府の指導のもと閉館せざるを得なかった。しかし、徐々に条件付きであるが開館している。あるいは、対面でない方向での開館も模索されている。韓国のスマート図書館は、その一例であるだろう。日本では最新の saveMLAK 調査[28]で、調査対象 1,737 館のうち、休館は 159 館であるとのことである。そして、Wi-Fi 導入状況を付帯調査として実施した。

今回の調査では、十分な情報を得ることは難しかったが、シンガポールなどインフラやデジタル化の素地が既に出来上がっている国は、今後もますますデジタル化がすすむものと予想される。スマートシティ国家として世界のトップクラスを走っているシンガポールの政策には、コロナ後を見据えた国家戦略として図書館施策が行われていることを注視する必要がある。

また電子書籍の読書人口の増加は、コロナ発生以後の世界の公共図書館における大きな特徴であるが、韓国、台湾でもみられていることが明らかになった。デジタル資料は、コロナ前から各国の各図書館が導入してきているが、人々が自由に動けないコロナ禍の状況で、図書館は利用者の情報要求にデジタルを使うことにより、より良い提供ができることを実感した。また、図書館資料のデジタル化もコロナ前からさかんに行われるようになってきたが、現状況に対応でき利用者に便利であることが証明された。とはいえ、閉館中の図書館に対して、「大学等に席を置かない人間にとって公共図書館は情報のインフラ。」[29]という利用

者の切実な声もあり、図書館に届いているはずである。この声にこたえるにはどのような対応が必要かは、個々の図書館の課題ともいえよう。具体的なサービスとして、VRS の成果も聞く。VRS はコロナ以前から導入され、コロナ以後その活用が急速に進んでいることを松野南紗恵は報告している[30]。そして、このニーズの対応策として最も注目された中に、メール、電話、チャットによる VRS の実施、ヴァーチャル・リソースへのアクセスの仕方を教える新しい方法の開発があったという。人々の情報要求に図書館はどう応えるか、図書館員はデジタル資料の提供が増える中で、どのような能力を付けていかねばならないか、すぐ真下に迫っている問題であると考える。

新型コロナウイルス感染症による影響の長期化から、ウィズコロナ時代を生きるため図書館はどのように取り組みを見せるのか今後の各国の図書館の動向に注目していきたい。

注

---

[1] saveMLAK　< https://savemlak.jp/>

[2] <https://www.ifla.org/covid-19-and-the-global-library-field/>

[3] 三浦太郎「協働と未来：第 86 回 IFLA オンライン大会」『図書館雑誌』115(12), 2021, p.758.

[4] 矢部萌「各国の図書館における新型コロナウイルス感染症への対応例」『カレントアウェアネス-E』395, 2020.07.30. <https://current.ndl.go.jp/e2284>

[5] <https://www.tndalu.ac.in/iliss/index.html>

[6] Miyuki Yamada, Dr.Tsutomu Shihota, Dr. Kazuko Maekawa, Zensei Oshiro(2021), “A Study of Public Services of Public Libraries in Japan during the Challenging Times of Covid-19”

[7] 코로나 19 로 휴관 중인 도서관들―독서 독려·정보 제공 계속 내일신문 2020.03.09
コロナ 19 で休館中の図書館-読書奨励・情報提供継続　来日新聞 2020.03.09
<http://www.naeil.com/news_view/?id_art=343003&cate=author&writer=%EC%86%A1%ED%98%84%EA%B2%BD>

[8] 文化体育観光部.報道資料，公共図書館非対面図書貸出サービス支援拡大. 2020.12.30
<https://www.mcst.go.kr/kor/s_notice/press/pressView.jsp?pSeq=18590>

[9] 文化体育観光部.報道資料，コロナ禍中の公共図書館の 1 日平均貸出冊数増加 2021.09.27.
< https://www.mcst.go.kr/kor/s_notice/press/pressView.jsp?pSeq=19090>

[10] 국방전자도서관，国防電子図書館　https://nddl.mil.kr/PTUS_Index.do>

[11] KYOBOeBooK <http://digital.kyobobook.co.kr/digital/ebook/ebookMain.ink>

[12] BOOKCUBE　<https://www.bookcube.com/main.asp>

[13] 宮原志津子「多民族国家シンガポールを支える図書館：国民統合と他民族共生」『多文化社会の社会教育：公民館・図書館・博物館がつくる「安心の居場所」』渡邊幸倫編著,

明石書店, 2019, p.123-138.

[14] シンガポール保険省(Ministry of Health)　<https://www.moh.gov.sg/>

[15] National Library Board Annual Report 2020 / 2021 <https://www.nlb.gov.sg/Portals/0/Docs/AnnualReports/2020/(PDF-A)%20NLB%20Annual%20Report%20FY2020.pdf>

[16] 「シンガポール国家図書館委員会（NLB)、サブスクリプション方式による児童書の宅配貸出サービスを開始：図書館員が選んだ 8 冊を毎月配達」『カレントアウェアネス』 2020.10.2 <https://current.ndl.go.jp/node/42156>

[17]「中国国家図書館、中国における『新型コロナウイルス感染症との戦い』に関する資料のアーカイブ構築計画を発表」『カレントアウェアネス 』2020.5.18 <https://current.ndl.go.jp/node/40971 >

[18] 須永和之「パンデミックのなかの図書館」『現代の図書館』58(4), 2020.12, p.163.

[19] 「台湾国家図書館、公共図書館の利用状況等に関する報告書（2020 年）を発表」『カレントアウェアネス』 2021.4.14　<https://current.ndl.go.jp/node/43801>

[20] 『109 年臺灣閱讀風貌及全民閱讀力年度報告 』 <https://nclfile.ncl.edu.tw/files/202104/531d83c2-e99f-46b9-9464-d21c0477a90f.pdf>

[21] 前掲 19

[22] 前掲 2

[23] 前掲 2

[24] 長塚 隆「コロナウイルス感染症と図書館メイカースペースへのリモートサービス導入の試みの今後」『情報メディア学会第 22 回研究会』2020.11.7 <http://www.jsims.jp/kenkyu-kai/yokoku/22/22-1.pdf>

[25] 「中国国家図書館、中国における『新型コロナウイルス感染症との戦い』に関する資料のアーカイブ構築計画を発表」『カレントアウェアネス』 2021.5.28 <https://current.ndl.go.jp/node/40971>

[26] Wuhan builds mini libraries in temporary COVID-19 hospitals, Xinhua 2020-02-20 <http://www.xinhuanet.com/english/2020-02/20/c_138802023.htm>

[27] 「インドの新型コロナウイルス感染症ケアセンターにおける図書館設置（記事紹介)」『カレントアウェアネス』 2020.5.18<https://current.ndl.go.jp/node/44090>

[28] 前掲 1　2022 年 2 月 4 日「COVID-19 の影響による図書館の動向調査 2022/02/01)」

[29] 徳田恵理「調ベント欲スレドモ：或る図書館利用者からみたコロナ禍」『日本図書館研究会第 371 回研究例会/第 39 回情報活動研究会（UNFOMATES）開催報告』『情報の科学と技術』72(2), 2022, p.75.

[30] 松野南紗恵「コロナ禍におけるバーチャルレファレンスサービスの動向」『情報の科学と技術』72(1), 2022, p.7-11.

＊URL は全て 2022 年 2 月 10 日付で参照